松本市美術館 news 2017.3 vol.51

あーとふる 51

グランプリ 天衣賞（松本市長賞）塔本賢一《Hello》アクリル、糸ほか（73歳 京都府）

佐々木豊賞　堀内一光《広島原爆71周忌「子供たちのメ・め・目が」》アクリル画（86歳 長野県）

小川稔賞　堀内かづ美《昭和の松本ぼんぼん》日本画（78歳 長野県）

中島千波賞　山下繁《睦月》日本画（75歳 岐阜県）

天衣無縫の世界へ——

70歳以上の方を対象とした公募展「老いるほど若くなる」は、7回目の開催を迎えました。

本公募展に対する思いは、賞の名前に表現しています。グランプリには「天衣賞」、準グランプリには「無縫賞」です。これは、「天衣無縫」という言葉からとったもの。天衣無縫とは、天女の衣には縫い目が全くないということから、文章や絵画がわざとらしくなく、自然に作られていること。また、人柄が飾り気がなく、純真で無邪気なさま、天真爛漫（らんまん）なことをいいます。

1月末、審査会場にて応募作品を一堂に並べると、まさにその世界が広がっていました。いずれも丹念に描きこまれた作品ばかり。そこにかけられた時間と熱情は、内から放たれる光、そしてチカラとなって私たちの心に響いてきます。それぞれの作品は、非常に個性豊かです。画面が激しく動きのあるものから静謐（せいひつ）さが漂うものまで、また喜びや悲しみを表現したものなど、様々なテーマで描かれていますが、内に秘められた想いはどの作品からも強く感じられます。

今回は、全国40都道府県から440点のご応募がありました。全作品を展示することは叶えられないため、その中から、審査のうえ入賞・入選した109点の作品を展観いたします。

どうぞ、70歳以上の皆さまが描いた天衣無縫の世界をお楽しみに。

稲村 純子（当館学芸員）

展覧会に関連した、プレ講座を開催しました。

「絵を描く手はじめ講座」

大変好評で、申し込みはすぐに定員に達し、24名の方にご参加いただきました。

講師に武井浩司氏（高等学校美術科教諭）をお招きし、初心者向けの講座を開催。「絵を描き始めたいけれど、何から始めたらいいの?」そのような方にお勧めの内容でした。絵を描くことは、幾つになっても始められます。想いを絵に表現できる楽しみが、これからの人生の傍らに加わることを願っています。

70歳以上の公募による美術展

第7回 老いるほど若くなる

題字／日野原重明

2017年 3月4日［土］▶4月9日［日］

〈開館時間〉9:00～17:00（入場は16:30まで）　〈休 館 日〉月曜日（祝日の場合は次の平日）

〈観 覧 料〉大人600円（500円）、大学高校生・70歳以上の松本市民 300円（200円）

※（ ）内は 20名以上の団体料金　※中学生以下無料、障害者手帳携帯者とその介助者 1名無料

リピート割引：大人 300円、大学高校生・70歳以上の松本市民 100円

※ 2 回目以降の観覧料、半券の呈示が必要です。他の割引との併用はできません。

主催：松本市・松本市美術館・（一財）松本市芸術文化振興財団

美しく生きる。 健康寿命延伸都市・松本

第16回 ポルカドット号探検記

春のリズム

松本市美術館館長　小川 稔

福島秀子《Whither Blue（I）》1982年

幾筋かの透明な色彩の流れが上から下へ。自然に湧出、滲み、留まる水か。その清冽さのイメージは作者自身の姿とそう隔たっていないようだ。

1951年に始まる「実験工房」はわが国の戦後文化史の事件だった。最近の回顧展などを通し世界的な再検証が行われている。設立の頃の有名な集合写真がある。20代の若者たちが、まだ定まらない未来に向け自信にみちた眼差しを送っている。その中央、作曲家・武満徹の隣に立つのがグループのクィーン、福島秀子だ。主導したのは音楽や舞台芸術を志す若者たちだった。実験的な音楽、ダンスの公演に福島も舞台美術家として参加している。新しい時代に若い芸術家たちがのびのびと参加する場所があった。その保証人、精神的父となったのが瀧口修造に他ならない。

1950年代、アンフォルメルと呼ばれた世界的な抽象絵画運動の渦の中に福島もいた。藤松博をはじめこの時代を生きた画家たちがみなそうであったように厳しい精神的葛藤、緊張に満ちた一時期を過ごし、成熟の70～80年代に至る。しかし、闘病のため活動が制約された福島にとってはもう晩年ということになる。最後の境地としてのブルーの世界。それについて大岡信は「ブルーは晴朗である。しかしブルーは憂鬱をも意味する。福島秀子のブルーは、その両方の意味において、切実きわまる彼女の生の証言である。」といい、瀧口修造はこう証言する。「雲と水と風のあいだか、いつか見たのか、確かではない。青い風景のようなものか。青といって口にすれば、過ぎてしまうもの。確かなのは、或る土地か場所のようなものが、いまどこか自分から離れて、しかも分かちがたく存在しているな、と思う瞬間のことである。」

Relay Essay 23（リレー・エッセイ）

冬の北アルプスを見て

中澤 聡（当館学芸員）

信州の冬は寒く、厳しく、そして長い。そう、うんざりするほど長いのだ。春が好きなのは、焦らしに焦らされるこの長さのせいなのかもしれない。

ただ、山が最高に美しいのは冬だ。東から西へ、職場へ向かう道中は見慣れた景色が続く。細い道を通って、よく引っかかる信号機で少し時間をロスして―いつもの風景。それなのに、家屋やビルから顔をのぞかせる雪化粧した北アルプスの山並みと、澄んだ空気が生み出す雲一つないブルーの空の景色には何度、息を飲んだことか。何度見ても、何年見ても飽きることがない、神々しいまでの美しさに足が止まる。

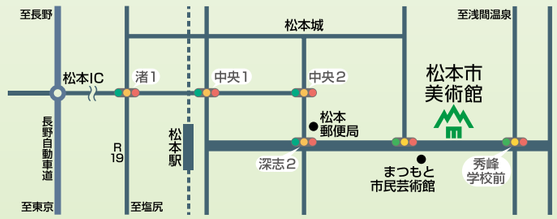
昨年、新たな祝日「山の日」が制定された。当館も「山の日」制定に合わせ、「遥かなる山～発見された風景美」という展覧会を開催し、明治から昭和前期にかけて描かれた山岳風景画をご紹介した。それまで未知の世界であった日本アルプスの姿を描きとめた画家たち。彼らの気持ちと、冬の雪山に揺さぶられるわたしの気持ちには、少しだけ重なるところがあるのでは、と勝手に想像してしまう。いや、きっと山は今も昔もわたしたちを魅了する。

春は待ち遠しい、まだまだ寒い日は続くだろう。それでも、あの景色とお別れの時期が近づくかと思うと寂しさも募る。

松本市美術館 news あーとふる
編集・発行
松本市美術館 MATSUMOTO CITY MUSEUM OF ART
〒390-0811 長野県松本市中央 4-2-22　TEL0263-39-7400　FAX0263-39-3400

リサイクル適性Ⓐ この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

◇松本バスターミナルからアルピコ交通バス・横田信大循環線 5 分［松本市美術館］下車
◇ＪＲ松本駅からタウンスニーカー（市内周遊バス）東コース 14 分［松本市美術館］下車
◇ＪＲ松本駅から徒歩 12 分　◇長野自動車道松本インターチェンジから車で 15 分



視る

このコーナーでは、当館所蔵の作品を取り上げて紹介します。

婦人とネコ

臼井 文平

作品名：《婦人とネコ》
作　者：臼井文平（1898－1994年）
データ：1928年　油彩・画布
サイズ：91.5 × 71.0㎝

当館常設展示室で開催中のコレクション展から一点ご紹介しよう。

今回、美術館のルーツと館所蔵の優品を愉しむことがテーマなので、どれも見応えのある作品ばかりだが、個人的にも気に入って楽しいものの一つ、臼井文平《婦人とネコ》をとりあげる。

臼井は松本市近郊に生まれるが、仕事の関係で滞在したニューヨークにそのまま永住した。家具デザインの仕事の傍ら油彩画を制作し、現地日本人美術家の団体展や日本の独立美術協会などに出品。当時アメリカを拠点に活躍していた画家・国吉康雄との親密な交流もあった。

本作は、独特の陰影を持つ色調の中で、一つの肘掛け椅子に同席する婦人と猫が描かれている。婦人の三角顔に青目がちな切れ眼、そして腿（もも）や腕の張り具合、よくみるとそれらは傍らの猫とそっくり。両者は呼応し、同様に主張している。画家、レオナール・フジタ（藤田嗣治）が、猫と女が如何に共通するかを友人に語っていたとき、目の前の猫をさして「君、ためしに帽子を被せてハイヒール履かせてごらん、もう全く女だぜ」と言った話を思い出した。椅子の左端を少し断ち、右に奥行きを設けた効果的な画面構成が、絵に動きを与えている。

細萱 禮子（当館学芸員）

身近なアート

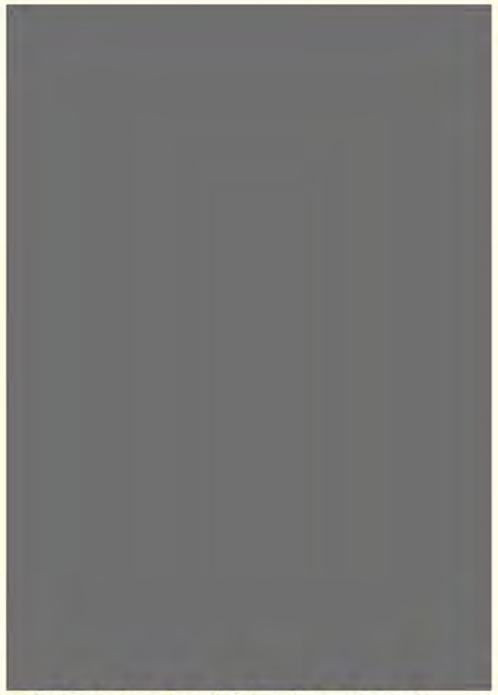
時代に衝撃を与えるヴィジュアル

「愛は飾らない。」「おいしい生活。」――このフレーズにピンと来た人は40歳以上だろうか。

1970年代から80年代にかけて、堤清二が率いる西武流通グループ（のちセゾングループ）は、こうしたキャッチコピーを使った広告によるイメージ戦略を積極的に打ち出した。老舗百貨店がお得意様向けのイベントを組むのが定番だった時代。まだ関心の少なかった現代美術や現代音楽、舞踊、演劇にスポットをあて、「見せたいから見せる」という姿勢を貫いた。宣伝のために起用されたのは、田中一光や浅葉克己ら一流のアートディレクターたち。とくに田中一光は、西武美術館（のちセゾン美術館）のポスターの前半期のほとんどを手がけ、カウンターカルチャーを語るのがクール、という風潮を生む手助けをしたのである。

雑踏のなかで異彩を放つポスター。「!?」という言葉にならない衝撃を街行く人に与えるポスターは、時を経ても色褪せない。

武藤 美紀（当館学芸員）



武満徹が企画した「Music Today '85」の告知ポスター（AD 田中一光）

Workshop Report

子どもからおとなまで――
あそぶ！ まなぶ！ 美術館!!

インスタント建築

8月20日(土)
中庭にみんなで大きな竹を運び込み、「せーの」で引っ張りあげて竹の柱を建立！ 柱のところどころに結んだカラフルな紐が広がる空間を楽しみました。

学都松本フォーラム

9月3日(土)・4日(日)
フォーラム会場のあがたの森文化会館でイベントを開催。松本市美術館のアートカードを使って、カードゲームを楽しみながら、所蔵作品の魅力に触れていただきました。

企画展「飯沼英樹　闘ウ女神タチ」関連プログラム

10月22日(土)
飯沼英樹さんの制作スタイルにならって、雑誌から好きなモチーフを選んで立体作品に挑戦！ 慣れないのこぎりでの作業も、真剣に取り組む姿が印象的でした。

高校生講座「続・アーティストと話そう！作ろう！」

五感で楽しむアート「美術館でヨガをしよう！」

11月6日(日)
謎の講師「ヨガ・ヒデキ」の正体はなんと飯沼英樹さん！ みんなで作品にちなんだポーズをとって、体をいっぱい動かしました。

はじめてのびじゅつかんさんぽ「探検！ びじゅつかん！」

9月28日(木)・11月2日(水)
9月は閉館後の美術館を探検。懐中電灯を持って、美術館のあちこちに潜む彫刻を探してまわりました。11月は石井鶴三特集展示を探検。作品の中に隠れているたくさんの動物たちを発見しました。

アートレクチャー

当館館長をはじめ学芸員が講師となって、美術に親しみ、学べる講座を開催しました。

10月27日(木)
学芸講座「上條信山の書法」

2017年1月7日(土)・14日(土)
21日(土)・28日(土)
2月4日(土)・18日(土)　全6回
館長講座「よみなおし日本美術史」

11月24日(木)
学芸講座「石井鶴三と挿絵」

版画講座

9月11日(日)・18日(日)・25日(日)
10月2日(日)　全4回
初心者対象の講座を開催。版の刻み具合、インクの乗せ方、刷りの調子…。少しでも何か違えば作品の仕上がりも変わり、版画の奥深さを実感しました。

「銅版画基礎講座（ドライポイント・エッチング編）」

「第13回松本市美術館版画講座受講生による作品展」

12月2日(金)～4日(日)
講座に参加の皆さんの成果を、作品展示やレクチャー、ワークショップをとおして、たくさんの方にご覧いただきました。

ワークショップレポート / 堀井 真美（当館学芸員）

※今後のイベント情報は、美術館ホームページをご覧ください。